屋久島における法華宗の廃仏毀釈と復興

松井孝純

一、屋久島に法華宗が……四一
二、廃仏毀釈以前の屋久島の法華宗……四三
三、屋久島の廃仏毀釈……四四
四、廃仏毀釈後の屋久島寺院の復興……四五
1　本興寺は屋久島の法華宗復興に熱意……四五
2　本興寺から屋久島へ派遣僧……四七
3　屋久島各寺院の廃仏と復興……四八
イ　宮之浦久本寺
ロ　永田顕寿寺
ハ　安房本仏寺
ニ　楠川本蓮寺
ホ　原永昌寺
ヘ　麦生本慶寺

ト　栗生本寿寺
五、結……吾

一、屋久島に法華宗が

屋久島は、鹿児島湾口から南方約七〇キロの海上に浮ぶ、ほぼ円錐形の周囲約一〇〇キロ、面積五三九、六九平方キロの島である。この屋久島の法華宗も、種子島と同じく浄光院日良上人（一四三一―一四九五）が来島してから本格的に弘通が展開する。然しその縁源は折伏殉難の聖僧定源院日典上人[1]（一四〇一―一四六三）の弘通に始る。

日良上人は苦心の結果種子島領主十一代時氏をして完全に法華宗徒化し、その時氏は法華宗を島の国教にすべく文明元年（一四六九）に布令を出して全島民の改宗を勧告しているのである。勿論領有していた屋久島へも同じく法華宗へ改宗を勧告しているのである。然し律宗を国教としていた島の保守性は、領主が法華宗に改宗したからといって、一朝一夕に法華宗へという宗教革命は成功しなかったのである。

時氏は種子島の残存律宗徒教化のこともあって、日良上人と相談の結果、日良上人が本興寺[2]の学室で共に学んだことのある今は両山兼職の金剛院日与上人のもとへ、事情を説明し布教僧の派遣を依頼する書を送っているのである。日与上人は、考えた末公家出身の当時四十六才にして既に次期本能寺貫主が約束され、文化人の間に交わって随所に講筵を張り、巨ましい布教力を持つ金剛院日増上人に種子島、屋久島の巡教を命じたのである。

日増上人は種子島、屋久島における律宗残党の折伏弘通に熱意を燃し、蓮光坊と円乗坊、若僧の本行坊を随行とし、菊若と鶴若に仲間の土佐小次郎を伴に長享元年（一四八七）十一月十九日種子島西之表の浜に到着したのである。日増上人は種子島における時氏の二叔教化を実行し、慈遠寺秀恵の改宗を果し、種子島から船便を得て海上遙かな屋

久島へ渡っていったのである。屋久島における日増上人の弘通については「三国名勝図会」(天保十四年刊)(3)によると当時の屋久島は種子島家の統治下にあり、屋久島の九十九嶽は久しく鳴動し、常に大地震動して島民は不安におのき続けていたのである。上人は直ちに島の永田に至り九十九嶽に登り祈念をこらし、妙経読誦し、その唱題が終ると同時にピタリと鳴動が止んだので、島民たちは、此の奇瑞に驚歎し、その法力の偉大なるを怖れ、その説く法華宗の教義に信服し、悉ちに律宗を捨て続々と全島民が改宗したのである。

日増上人の南海弘通の効顕については日良上人と共に別述に譲り、種子島・屋久島に在島二年、使命を果された日増上人は延徳元年(一四八九)の中秋、島の浄蔵坊に送られて帰京されているたのであるが、この時から屋久島の宗教は法華宗の本能寺・本興寺の傘下に入ったのである。

二、廃仏毀釈以前の屋久島の法華宗

屋久島の玄関は今でも宮之浦町である。この宮之浦町に久本寺という島中随一の大寺がある。その久本寺の寺誌を「三国名勝図会」から抜萃する便宜を許されたい。

長遠山久本寺、宮之浦村にあり、京都本能寺、摂州尼ケ崎本興寺の末にして、法華宗なり。本尊釈迦如来、多宝如来、(座像・又左右に不動明王、愛染明王、及び四天王等を安置す)、開山金剛院日増上人なり。此村の祈願菩提所なり。種子島時氏創建せり。享保十六年本堂より火起り院房盡く焼亡せり。其時寺内の宝物諸記録等、皆其災に罹りし故、今に島中諸寺の由緒詳ならずといえり。其後本堂再建して、享保十八年癸丑十一月成就すと記録に見えたり。

○番神堂　本堂の前にあり。南に向ふ。本尊鬼子母神、十羅刹女凡そ十一体(木像なり。右位には三十番神木像三十体、

左位は日月星木像三体、及び一品法寿権現位牌を安す)、享保中、本堂焼亡せし時、此堂は災に罹らずとぞ。初め寛文四年建立してありしを宝暦四年再建せしと記録に載せたり。

以上の如く屋久島の代表的な寺院の寺誌にもあるように、法華宗寺院としての往時の断面を知ることができるのである。尚、廃仏毀釈以前の寺院等に関し、同書に屋久島法華宗寺院は、

本寿寺（栗生村）　本隆寺（一湊村）　本仏寺（安房村）　顕寿寺（長田村）　長寿院（長田村）　蓮華寺（長田村）　本蓮寺（楠川村）　光照寺（小瀬田村）　本要寺（船行村）　本住院（原村）　本経寺（尾野間村）　典良院（小島村）　岩勝寺（平内村）　隆泉寺（湯泊村）　中間寺（中間村）　本光寺（志戸子村）　本満寺（吉田村）　本慶寺（麦生村）

の十八寺院が天保年間に存在していたのである。尚、このうち本寿寺・本隆寺・本仏寺・顕寿寺は相当な由緒からか本能寺・本興寺の両本山の直末であるが、その外の諸寺院は、久本寺か上記の四カ寺の末寺であって両本山の孫末寺院であったと記録されているのである。

而して、此の諸寺は、各村の祈願寺であり、菩提寺であり、両者を兼ねて島民の生活の依り所でもあった。特に四方を海に囲まれ魚業を生計とする島民にとっては、豊魚を祈願してもらうため、あるひは病気平癒の加持祈祷を必要としていたのである。

江戸末期の安房本仏寺住職、如竹日章（一五七〇―一六五五）は「屋久島聖」として、未だに島民から敬慕され、安房川口畔には大正十四年に建碑された顕彰碑文が、その徳を讃歎しており、毎年旧暦一月十六・十七日は如竹祭りが安房町でおこなわれ、その時には「如竹踊り」があり、輪になって踊り、踊り歌まである。法華宗僧が島民の生活の向上に貢献した菩薩行の功績である。屋久島の法華宗は、この如竹日章を始めとして、島の文化の向上に密接な関係を持ち、島の唯一の宗教として全島を法華色で覆うていたのである。然し、その記録のほとんどが廃仏毀釈で失な

(4)

はれてしまっているのである。

三、屋久島の廃仏毀釈

日本全国の廃仏毀釈についての資料や論述は極めて多いが、その隣の離島屋久島に関しては、種子島と共に研究資料が少ない。その原因は、離島と法華宗という特殊な点がそうしたと思われるが、それと同時に、その廃仏毀釈が徹底していた為に、その研究資料の発掘が困難だったことにも原因があると思われるのである。

屋久島の廃仏毀釈の時期は、種子島と同時期にやってきておる。そして、その方法も種子島と同じであった。（桂林学叢第九号参照）そして、その結果、種子島と同様に仏教に関するものは、何ひとつ残らず島から姿を消した。

「屋久島町誌」[5]によると「かかる法華一色の屋久島にも廃仏毀釈の大旋風が捲き起り、総べての寺院が裸にされ、塵一つ留めぬまで仏像、仏具、記録、宝物等一切合切焼却された。そして世は挙げて神道一色となった」とあるし、また「屋久島町誌」[6]には「後花園天皇寛正四年（一四九三）蔵野の浜に日典上人を生埋にした指揮官、種子島家の老職北条氏は、その後まもなく父母ともに、つぎつぎ下水にはまって変な死に方をした。その後も代々変死が絶えないで、畳の上で普通の死に方をする者はなかった。幕末の頃、北条出羽守という者が、先祖代々日典の霊にたたられるので……（中略）……北条氏はこのようにしてついに絶滅した。北条出羽守の姉婿本田氏は、伊勢大廟の神職となり、高位に進んだが、日本全国の信教を神道一色にぬりつぶし度いという野望を起し、おりからの明治維新の大旋風に乗って、廃仏毀釈の暴令を発するにいたらしめた。本田氏は自ら鹿児島へ来て、先づ第一に種子・屋久・国永良部三島を徹底的に棄釈し、本土の一部にも自ら指揮した。……（中略）……本田家の家族が相次いで死亡し、最後に残った妻北条出羽守の姉は〝これは全く仏罰である〟といって死んでいった。そして北条家とともに、本田家もまた滅亡し

た」とある。この信憑性についての研究が必要であるが、明治二年八月八日の一片の布令によって、数百年にわたって島民の生活と一体となってきた仏教を、その僧尼から、寺塔および本尊、経巻にいたるまで、一挙に地上から消そうとする暴挙に対する民衆の怒り、その抵抗の声としての記述かとも受けとれるのである。

四、廃仏毀釈後の屋久島寺院の復興

1、本興寺は屋久島の法華宗復興に熱意

明治九年九月五日付の鹿児島県参事田畑常秋から「各宗旨の儀、自今人民各自の信仰に任せ候条、此段布達候事」という信教自由の布達が屋久島にも届いたが、種子島の法華宗寺院と同様に、総べての僧尼が強制的に還俗し復飾しており、寺院の総べてが転用されたり廃毀されたりしている現状では、布達を手にした人々も簡単に応えて起ち上れなかったのであろうと思う。

廃仏毀釈の大旋風は、官権を借り根こそぎ仏教色を一掃し、礼拝の対象の仏像も仏檀も曼荼羅本尊もすべて焼きつくしてしまっており、寺院跡には神社が建てられたりして、島民の心を神道一色に塗りかえてしまっておるから、道心の志を残している僧尼や信徒がいても、直ちに寺院の復興や、信徒の結集へは結びつかなかったのである。

然し、種子島南種子平山出身の柳田日晧（一八〇七―一八九三）が、強制還俗の厄に会って禎三と称していたが、明治八年には、尼崎本興寺へ登山し僧籍復帰をし、種子島西之表に本源寺仮説教所を作ったり、尼崎本興寺と連絡をとって法華宗寺院復興に奔走していたから、やがで屋久島へも渡島し、宮之浦や栗生の信徒と連絡をとりだしたのである。そうして西南の役の余塵がおさまった明治十一年十月六日、種子島西之表に、本興寺古森日経貫主と、その随行堯運院井原日暁、妙堯寺牧瀬日誘とを種子島・屋久島法華宗復興の巡教に迎えることに成功したのである。そして一

行は翌十二年には屋久島へ渡島しているのである。

屋久島楠川邑本蓮寺の檀家総代が寺から預っている縦四十八糎、横八糎の屋久島杉板の曼荼羅の脇書に

明治十有二年宗門復興弘通之際四月十一日応需拝書之　両山九十世日経花押

祈屋久島楠川邑男女信者中　各願如意家運栄昌　子孫繁栄除災招福

とあり。その板裏に

明治三年一月廿三日依旧藩制寺院悉廃毀九年新信教自由公布ニ依従大山県令仏道布教不苦之令アリ。十一年冬為復興種子島西之表ニ着全島巡村之后十二年一月中旬此邑ニ巡化ス四月中旬乗船之際信徒懇請ニ任再来説教二座於学黌修之翌日依請願次第記之畢

副戸長三角徳市　惣代牧忠八・本田孫助　吟味役柴喜兵衛・藤原福二郎・泊新七・牧新吉・牧吉治郎　右之外四十八名信徒　異体同心信心増進

とある。十一年冬に種子島西之表につき十二年一月には屋久島を巡化し、信徒の糾合につとめ盛に法華宗復興に活躍をされたのである。国之永良部島の巡教もこころみたが、冬の季節風で海が荒れて、三度とも渡航に失敗している。然しこの巡教は法華宗復興のために非常な力を与えているのである。時に日経貫主は六十一才頃である。老体をいとわず交通不便な離島巡化は誠に御法労だったと思う。

それから数年を経た明治十八年頃になると、漸やく屋久島にも信徒の護法受宗の信心が実り、各地に布教所が開設されるようになった。即ち原の本住院、栗生の本寿寺跡に種子島本源寺の説教所ができている。種子島の本源寺説教所が軌道に乗り、旧寺号の公称が可能になりだした頃から屋久島でも、熱心な信徒によって再びお題目の声が聞こえだしたのである。

2、本興寺から屋久島へ派遣僧

京都本能寺・尼崎本興寺は幕末からの三途不成論争の収拾に懸命であったから、外へ向っての教法宣布活動に支障を来たしていた。特に三途不成論を楯に、在家仏教運動を展開する清風日扇と、それを支援する京都妙蓮寺に対して苦慮し、また清風の布教活動に対抗する両山信徒の八品講活動との激突の調停などに追われ教線拡張に専念できない状態であった。

然し明治十五年九月十二日の東京大教院における本能・本興・妙蓮・光長・鷲山の五大本山の円座会は、法体機情久遠今日十界当体即身成仏の決議によって、五山が和融し、漸やく日隆聖人の下に五山の正常化をみたのである。

その秋には大阪大願寺に設置の教学院を尼崎檀林に吸収し、前向きの教団態勢を整え、本能寺は諸堂宇の整備を始めることができるようになったのである。本興寺もまた懸案の種子島・屋久島の法華宗復興のため強力な布教師の派遣にふみきったのである。

即ち明治十七年三月に本興寺は信隆日秀・佐藤日省両師を、鹿児島・種子島・屋久島の巡回特派布教師に任命し、廃仏毀釈によって失われた教線の回復に乗り出したのである。

即ち種子島本源寺は本興寺から援助を得た柳田日晧の自費によって同十年旧地を買収し、古家を春田日交（山田永叔の師）の自坊成住院を本源寺復興のため住吉村から三ケ月を要して海上輸送し、同十六年本堂を復興再建したのである。[7] 然しこの本堂は同十八年八月十五日出火焼失した。[8] だが再び同三十八年山田永叔によって再建されておるのである。

屋久島へも信隆日秀・佐藤日省両布教師の援助の下に各地に法華宗の布教所が開設されたのは同十八年である。[9] このようにして廃仏毀釈に依って壊滅瀕死に陥った仏教は、再び勢力を回復するに至ったのである。

即ち明治十八年屋久島の原の本住院、栗生の本寿寺の跡に本源寺布教所が開設された。また相前後して宮之浦久本寺、安房本仏寺、永田顕寿寺、楠川本蓮寺、小瀬田光照寺、麦生本慶寺、小瀬田光照寺、原永昌寺などが、それぞれ廃仏毀釈以前の境内地か、その境内地が小学校などの公共施設に転用されている場合は、その近辺の地または信徒の家などを借りて、寺号を冠した布教所または説教所として地区の熱心な信徒の護法愛宗の下に次々復興していったが、残念ながら以前の如ではなかった。

(10)

3、屋久島各寺院の廃仏と復興

イ、宮之浦久本寺　延徳元年（一四八九）本能寺日増上人の来島によって、律宗より法華宗に改宗した。寺誌については前述の通りであるが、この宮之浦は島津氏が種子島と共に屋久島を領有し、島津義久が「屋久島掟条々」を正親町天皇の天正十四年（一五八六）に発布し、島津氏の植民地政策の滲透に依り、文禄四年（一五九五）検地を実施し、藩の出先機関を宮之浦に置き、寛永元年（一六二四）頃には島津藩の琉球との交易基地となる。そして寛永十二年（一六三五）に屋久島代官所が置かれてから島の中心地となった。久本寺も寺格があがり、末寺を擁し島の本山としての伽藍を宮之浦港の東の高台に構えるに至った。その裏の墓地には奉行所若侍墓（だんな墓）が現在もあり、屋久島へ派遣された薩摩藩の代官や奉行所役人が、帰藩を待たず島で逝った人たちの墓地である。明治三年の島を襲った廃仏毀釈以前は現在の寺は、五十米ほど下の平地である現在の幼稚園にあり、古老の話では、その本堂前に仏具・仏典・宝物・記録等の一切が、藩から来た役人立合の下に焼却されたが、日増上人などの曼荼羅本尊（文亀元年筆）は、役人に隠くして檀徒の屋根裏に保護したとの事である。現在の本堂前の歴代墓や、妙経読誦記念碑は本堂再建の折、土中から堀り出して建立したとの事である。琉球石の大きな墓石や碑などが復元され、往時の壮大な寺観をしのばせている。明治十二年来島巡化本興寺日経筆の曼荼羅が常任久本寺と書かれて、他の島内寺院と同じく明治十八年に布教

所として再興され、山田永叔（一八六四―一九五三）の努力によって十数年を経て現在地に小堂を再建し、昭和九年改築した。昭和二十二年松下日澄によって寺号が復興し、同三十八年に本堂が改築再建された。長遠山と山号している。現在松下日澄、法務渡辺智宗。（その他文中の方々も敬称を消略している）

ロ、永田顕寿寺　延徳元年（一四八九）本能寺日増上人来島の砌り、益救之八重岳（屋久島の宮之浦岳―九州の最高峰、永田岳、栗生岳、黒味岳、翁岳、陣宇岳、モッチョム岳、高塚山、愛子岳、丸忠岳などの島中央の連峰の総称での旧名である）の権現が怒っておられるのか全島が鳴動し、種々怪異なことが次々おこり、島民が不安な日々を送っていた。日増上人は島の西の長田村へ渡っていかれ、当時の長寿院に旅装を解かれたのである。そこから京都より随行してきた僧を使として、妙法蓮華経の法札を、益救岳に納めて御祈祷をなされたのである。俗に一品宝珠大権現の勧請という。然し、その使僧が麓の長寿院に帰えり着くやいなや、不思議にもその法札が飛んできて長寿院の堂の中に戻っているのである。念が足らぬから法札が舞い戻ったのだと、もう一度嶽に登り丁寧に勧請したが、その法札が再び舞い戻ってきたので、三度目には日増上人が自から嶽に登り、一品宝珠大権現の宝殿で妙法蓮華経を読誦していたら、忽然と白鹿があらわれ、上人を礼拝し忽ち姿を消した途端に、益救嶽の鳴動がやみそれからは、全島の震動も、怪異もなくなって平隠な屋久島になったのである。以来全島の寺も人も法華宗の信者となった。この長寿院が現在の永田村の顕寿寺の遠始である。明治三年に廃仏毀釈の厄に遇うて堂宇が破壊されていたが、明治十八年本興寺布教所として、再興された。文禄四年に此の永田顕寿寺の日啓が従軍僧として朝鮮に渡っている。これは後陽成天皇の文禄元年（一五九二）豊臣秀吉によって朝鮮の役が起った時島津氏の命を受け種子島久時も出陣した。当時屋久島は島津氏直轄領であったので、島津軍に島の武人たちも参戦した時日啓は従軍僧となったのである。明治三十五年頃に松下日慈が永田布教所の担任となり、昭和七年にその弟子松下日澄が兼務し、昭和二十三年寺号が公称され、渡辺智宗が住職し、現在計屋

智成が法務をしている。

ハ、安房本仏寺　安房に流れ込む安房川口は深い入江に依る避難港として早くより利用され、昔遣唐使の船が嵐に遭って避難した唐船渕があり、弥生後期の安房遺跡があり、琉球との交易港として早くから開けた村落である。延徳元年本能寺日増上人来島の砌り、律宗寺院改宗のあとを本仏寺と称したものであろう。江戸前期の屋久島聖如竹日章（一五七〇―一六五五）によって本仏寺は一躍有名になった。然し廃仏毀釈によって堂宇及び寺宝、如竹の遺品等のすべてが壊滅した。如竹日章の五輪塔の墓は安房川口北岸にあったが、如竹神社と称されて仏僧であることすら消されてしまっているのである。

明治十八年になって信隆、佐藤両布教師が来島の砌り、旧檀徒を糾合し本仏寺復興を決議したのであるが、住僧がいないので檀徒らが自主的に民家を本源寺布教所とし、山田永叔の巡回布教を待って信仰を確認しあって数十年を経過し、旧境内地を買得し、小堂を建てた。安房一村一箇寺の法華宗信仰は復活した。廃仏毀釈後に建立された神社の横に本堂があり、参道の入口には現在も鳥居が建てられてあり、神社共存の形式が持続されているのである。現在は柳田智皓寂後を川田智学が住職し本堂を再建し復興に努力している。

ニ、本蓮寺は宮之浦から三粁ほどの楠川にあり、前記の古森日経貫首筆の巡教板曼荼羅があり、明治十二年には久本寺・本仏寺などと同じく本興寺の貫首の巡化に浴し、柳田日晧、山田永叔などの奔走により同十八年頃に楠川法務所が設置され、明治四十年松下日慈担任となり、昭和の初めの頃には関野智良らによって本蓮寺が再建され、昭和二十二年に徳永禎山によって寺号が公称され、現在は牧智栄が住職している。

ホ、永昌寺は原にあるが、廃仏毀釈以前に本住院と称し、元禄年間に改築され栄えていた、現在の永昌寺所在地の西方の神山小学校の校庭南面に境内[12]があった。現在の永昌寺前の仁王像は、そのか[13]みの本住院の守護像であった。明治

・大正・昭和の間、布教所として部落の信仰を集めていたが、戦時中に永田永昌が担任となり、自分の僧名の永昌をとって永昌寺として、昭和二十二年十一月二十日に落慶法要と永昌寺寺号公称を行ったのである。従って本住院が永昌寺と称し復興したものと認められるのである。

然し廃仏毀釈以前には尾之間に本経寺があったので、尾之間に本経寺が復興されなければならないのであるが、その本経寺は現在「仏峰」と呼ばれ中央公民館の所在地になっている。また廃仏毀釈の時に寺宝のすべてを焼却した所であり、明治十三年尾之間小学校が開設され、校舎は本経寺の堂宇であった。廃仏毀釈後の島内の寺院の堂宇のほとんどが、その当時の学校の校舎に転用されていて教育の場となったことは、その住職が教育者となっていたことも考えられるので、法華宗の信仰が日常生活となっていた島の人たちにとっては、せめてもの救いであったと思われるのである。その後永田永昌は種子島日典寺へ転じ、松下日澄が兼務し、次の甲斐清雲が兵庫県淡路島多賀東林寺へ転任したあと、現在は久木竜雲によって堂宇も造改築され寺檀一体となって復興へ努力している。

へ、本慶寺は麦生にある。廃仏毀釈以前と同じ処に、法華宗信仰に篤い村民によって堂宇が護られていた。然し寺の仏具類は廃仏毀釈時に焼却されておる。寺号公称は住職がいない為に遅れたが昭和二十七年（一九五二）に堂宇が新築され復興し、川内田智弘が宮崎川内勝蓮寺に転任後、再び無住となったが、現在松下妙受の名儀が付けられている。

ト、本寿寺は栗生にある。栗生は島の点在する村落の馬蹄型の西端にある。明応年間（一四九二―一五〇〇）に本能寺日増上人によって造営されたと伝えられている。日増上人の来島期間は長享元年（一四八七）十一月から延徳元年（一四八九）の間のうちであるから、日増上人来島布教が直接原因となって、律宗の寺が改宗したものではないかと思う。日増上人は明応元年に本能寺七世として晋山され、明応年間本能寺にとどまっておられ、また明応四年には種子島日

良上人が示寂されており、法華宗の教義にふれた島民らの信仰が明応年間の本寿寺造営説となったものであろう。その後に湯泊隆泉寺、平内岩寺、中間中間寺などの本寺として本興寺・本能寺の直末となったものである。寛永年間には屋久島聖如竹日章が安房本仏寺から栗生を訪ねてきたりして、栗生村民の信仰を更に高めて本寿寺は屋久島での西の本寺として栄えていたのである。本寿寺に琉球石[15]の大きな墓石が幾つもあるのは栗生が琉球との直接交易を物語り、元禄の頃は豊かな村落であったと思われる。また貞享・元禄の頃、今の栗生神社境内地に堂宇が建立されていたということが、その共同墓地の墓碑から想像されるのである。

この本寿寺も明治三年の廃仏毀釈に、仏具・仏典・宝物・記録類の一切が藩庁から派遣された三名の役人監督の下に親元の浜に持ち出され焼却された。然し熱心な法華宗信者達の中には仏典、宝物の一部や自宅の仏像類などを秘匿したのである。従ってこんな話も伝わっている。浜へ仏具類を持ち出す時、小さな仏像が一箇道に落ちていたのを、山崎袈裟五郎[16]という少年が発見し秘蔵したが、その仏像の加護で彼は異常な出世をしたと云われている。

明治十八年、本興寺から派遣された信隆、佐藤両布教師の来島を契機として栗生に、本興寺布教所が設立された。当時栗生には真宗大谷派の熱心な信者脇田次郎八を中心に、浄土真宗が普及し、旧本寿寺檀徒を念仏信者に引き入れて次第に勢力を持ち出していた頃であった。従って両布教師は法華宗徒の結集を計り後事を柳田日晧、山田永叔らに托して帰阪したのである。然しそれに対抗するように真宗大谷派[17]説教所が同二十年に栗生に開設され、西本願寺別院から初代輪番として藤大智を派遣さし、次々と優秀な輪番を送り込んで栗生の半数と、中間・湯泊の全部、小島のほとんど、平内、尾之間の一部とに信者を作り、明治四十一年には七宝山大照寺を開創したのである。即ち法華宗門首脳部が三途成不論に血相を変えている間に、念仏無間堕獄を教条とする教線の拡張を忘れてしまっていたのではないだろうか。

全島法華を誇った屋久島の教線の一角は既に明治の中期で壊れてしまったのである。中間、湯泊、平内にあった隆泉寺等の寺も、全村真宗信徒で固まっていては再興できるはずがないのである。また一湊の本隆寺も然りである。その他の本宗寺院の復興がなされていないのも真宗や、その他の宗教の島内流入による信徒の移動に対する対策の手遅れであると思う。

本寿寺は栗生半数の法華宗徒の協護の下に明治三十二年堂宇が完成し、昭和二十二年一月三日寺号を復興し、現在は妙照山本寿寺として中島日瑞（智慶）住職によって教線が確保されている。

五、結

種子島、屋久島における廃仏毀釈については、彼の膨大な資料を全国から収集しておる「明治維新・神仏分離資料」全五巻に収録されておらないのである。それは離島と法華宗という特殊な事情があったのか、または適当な報告者がおらなかった為であろうかとも思う。然し種子島、屋久島の廃仏毀釈は、既発表の廃仏毀釈が実施された地方の規模や内容において、決して劣るものではない。然も多種多様な宗教が同居していた地方でなく、法華宗一式の仏教を両島の国教の如くし、島民の日常生活と密着し、その生活の中で生きていただけに、他地方の如く廃仏毀釈が容易に行なわれてはならなかったはずである。従って両島に嵐の如く襲うてきた廃仏毀釈の蛮行の跡を記録しておかなければ、宗教史上また宗門史上誠に浩歎の至りと思い記述した次第である。

昭和四十八年から数回にわたり両島を訪ね、該地の神社の片隅に、小学校の校庭のそばに、道路のわきに、忘れられた如く放置されている石塔や墓石を探ぐり、図書館や本屋を廻わり古老を尋ね、先に「桂林学叢」第九巻に「薩摩及び種子島における法華宗の廃仏毀釈」を記載したが、本論は廃仏毀釈を媒介として往時今時の屋久島の法華宗各寺

院も併せ紹介をしようとしたものである。而して拙論の記述の誤りや資料の収集についての大方の教示を乞う次第である。

〔註〕

(1) 「宗教革命家・南海の聖日典上人」（松井孝純著）に詳説されている。
(2) 「種子島年中行事」（熊毛文学会発行）一三三頁下段。
(3) 「三国名勝図会」一二四頁—本書は天保十四年薩摩藩主島津斉興のころ五代秀堯を総裁として橋口兼柄、五代友古らが編纂した。廃仏毀釈で仏寺および記録が焼滅したので、藩政時代の仏教についての本書の価値は極めて大きい。
(4) 「宗門史談」（法華宗宗門史談会刊）第三号—如竹日章上人の研究—参照。
(5) 「屋久町誌」（鹿児島県屋久町発行）一二五頁。
(6) 右　同　一七八頁。
(7) 「鹿児島県の歴史」（原口虎雄著）五三六頁。
(8) 種子島西之表本源寺誌。
(9) 「屋久町誌」　一二五頁。
布教所の開設届けは記録の上では明治十八年であるが、同十年頃には、宮之浦の高橋慶成と安房の泊順達の二人の老僧が、明治中期まで島中の布教所を巡回し法務を報っていた。（松下日澄師談）
(10) 右　同　一二六頁。
(11) 右　同　二九頁。
(12) 右　同　一九六頁。
(13) 右　同　右　同。
(14) 右　同　右　同。
(15) 右　同　二〇一頁。
(16) 右　同　二〇二頁。

(17)

右　同　　二〇三頁。

真宗の島内流入は、薩摩藩が一向宗禁断を施行した天正以後（一五七三～）、一向宗徒を発見したら士は庶民におとし、時には斬罪、流刑、奴隷に処し、百姓以下は流刑、笞刑を加えるなど残酷をきわめた。それらのうちの流刑者を、法華宗一色の種子島、屋久島などへ流罪にした。彼等は死ぬまで改宗せず島で果てた。島では役人などに監視され島民との接触が禁止されていたので一向宗の伝染はなかった。たまたま慶応元年（一八六五）、喜入の郷士脇田次郎八という隠れ一向宗徒が、屋久島栗生にかつを船建造頭梁として来島し、そのまま定住したが明治以後信教自由の時代になって、真宗を布教し同信を獲得し、本願寺へ布教僧の来島を要請し栗生を中心に大きく発展した。現在屋久島の宗教分布は法華宗と真宗の勢力が伯仲しており、大社教、天理教、立正佼正会、仏立宗、創価学会その他の新興宗教も次第に勢力を扶植している。廃仏毀釈の影響とばかりいえないものがある。